

「蜃」に関する考察

石須 秀知 (魚津埋没林博物館)

「蜃気楼」の語源は、紀元前の中国で司馬遷がまとめた『史記』のうち、天文・気象現象を収録した『天官書』の「海旁蜃氣象樓台」という記述とされる。この一節は、「海旁(海のそば)の蜃の気は樓台(高い建物)を象る」という意味になるが、蜃とは何であるかの説明はない。

一般に、蜃気楼の蜃は大ハマグリとされることが多いが、その一方、蛟龍という龍の仲間とされる場合もある。ハマグリと龍とではずいぶん異なる生物であるが、なぜ2種類の解釈があり、どちらが真の蜃なのか、これまで深く考えられることはなかったように思われる。ここで、『本草綱目』の記述から読み取られる2種類の「蜃」の混同事情と、江戸時代以降の日本における両者の扱われ方を考察する。

『本草綱目』は、中国の代表的な本草書(多種多様な医薬の材料を収録した書物)であり、江戸時代には日本にも多く輸入された。そこでは、貝類と龍類双方に、「蜃」の名が当てられる生物が掲載されている。

- ・貝類の蜃：「車螯」(ハマグリの間で大型の1種)の別名
- ・龍類の蜃：「蛟龍」の項目中、附録に蛟の属として収録

この貝・龍2種類の蜃それぞれの説明の中では、互いに同名異物であることが書かれている。にもかかわらず、両方の蜃に「気を吐いて楼閣を現す」という意味の記述がある。しかし、龍の蜃は、吐く気やその脂で作った蠟燭の炎の中に楼台を現す様子などが細かく記されているのに対し、貝の蜃ではごく簡略にしか記されていない。また、貝の蜃は大型のハマグリであって、食べ方、用法などは、あくまで尋常な海産物として解説されている。決して妖怪じみた大ハマグリではないことに注意しておきたい。

『本草綱目』の記述から読み取られるニュアンスとしては、当初、蜃気楼の蜃は龍類の蜃を指したものであったと思われる。それが、伝承されるうちに同名異物が混同

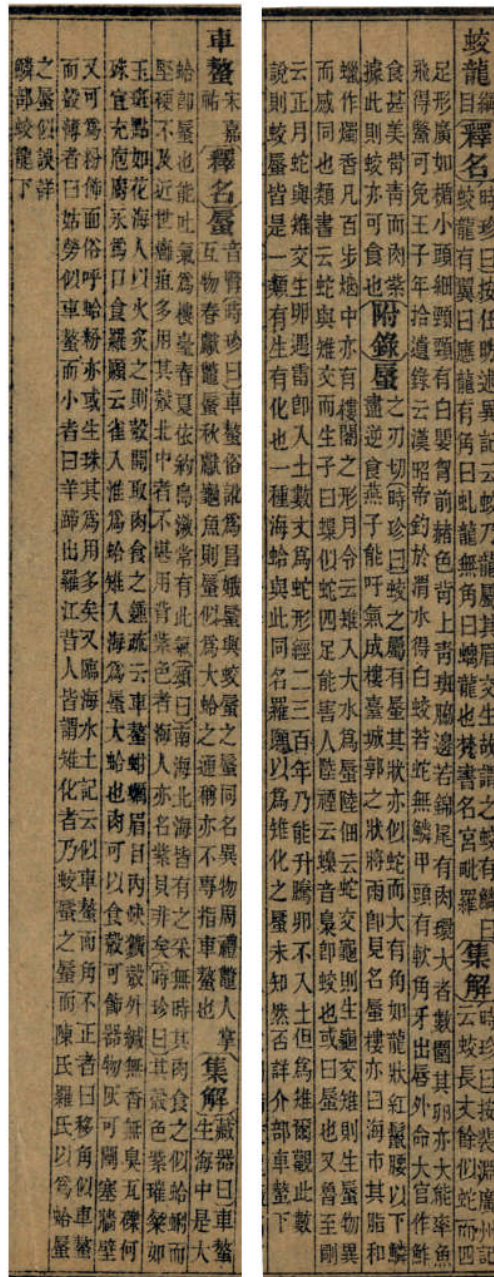


図1 本草綱目の記述

され、両方が蜃気楼を作り出す生物になってしまったのであろう。新しい本草書の編纂は、それ以前の本草書をほぼ丸写しにした上に、新しい知見や他の書物、伝承などを付け加える形で行なわれていたという。

そのため、ある時点で誤った情報が紛れ込むと、それがそのまま後へ引き継がれてしまう可能性がある。より確実に特定するには、『本草綱目』の記述の原典をさかのぼり、古い文献に当たるなど、さらなる調査が必要である。

このように、中国でも混同されたまま、『本草綱目』などの輸入とともに、日本にも蜃気楼を作る生物として2種類の蜃が入ってきたと考えられる。しかし、一般的には大ハマグリの方がはるかに知名度が高い。

大ハマグリの気と楼閣を組み合わせたデザインは、蜃気楼文様、蜃気楼図などと呼ばれ、吉祥瑞兆のめでたい文様として、江戸時代以降の美術工芸などに幅広く用いられている。絵画をはじめ、陶磁器類、着物、袱紗、欄間彫刻、刀の鏝、根付、祭の山車の彫刻や幕、傘鉾などさまざまなものにハマグリ+楼閣のデザインが見られる。おそらくこの文様の起源も中国にあり、日本ではそれを模倣したと考えられる。

一方、龍類の蜃と楼閣の組み合わせは、九谷焼や源内焼など一部の陶磁器で“龍宮図”として使われている例以外は、絵画や文様としてはほとんど登場しない。中国にこの類例があるかどうかは不明であるが、日本では文様として定着していないように思われる。ただ、霊獣の一種として、寺院、あるいは祭の山車などの彫刻に龍類の蜃が用いられている例は少なくない。代表的なのは、日光東照宮奥社にある銅製の唐門(鏝抜門)の両脇を飾る蜃である。また、各地の寺院にある銅製灯籠の蕨手(笠の端の巻き上がった装飾)にもしばしば蜃が付いている。これらの蜃は皆、口から上方へ巻き上がる気を吐く形が表現されていることで、普通の龍とは区別できる。

この2種類の蜃の扱われ方を見ると、ハマグリの蜃は楼閣を伴う蜃気楼の表現が約束されているのに対し、龍の蜃の方は、純粹に“気”を吐き出す霊獣として表現されている。すなわち、元来、龍の蜃は気を吐く生き物として認識されていたものであり、その気の中に楼閣が現れるのは後に付け加えられた話と考えることができる。そして、蜃の字と気を吐いて楼閣を現すという部分が抜き出され、そこに同名のハマグリの蜃が納まってしまったのではないだろうか。

中国の原典の探索は相当に困難と考えられるが、裏づけとなる文献や文様の例がないか、今後も留意していきたい。



図2 上:正院焼色絵蜃気楼図大平鉢
下:九谷焼吉田屋窯龍宮図大平鉢



図3 銅製燈籠“蜃”蕨手(南砺市瑞泉寺)